



明治期の漢語理解—漢語辞書をめぐって—

何，芸芑

(Degree)

博士（学術）

(Date of Degree)

2023-03-25

(Date of Publication)

2024-03-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第8517号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482265>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文内容の要旨

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

「明治期の漢語理解 ―漢語辞書をめぐって―」

氏 名 : 何 芸 芑

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程文化構造専攻

指導教員氏名 (主) 石山 裕慈 准教授
(副) 實平 雅夫 教授
(副) 緒形 康 教授

(注) 4, 000字程度(日本語による)。必ずページを付けること。

研究の背景と目的（序論）

明治初期は漢語流行の時期であり、従来漢語使用層とされていない人々の間に漢語の使用が広がっている。政府の公文から民間の書物まで漢語が多用されており、西洋文化を受容する際にもたくさんの新語が創出された。本論文では、明治期の漢語に焦点を当て、その時期の代表的な資料の一つである漢語辞書を調査対象とする。選定した四冊の漢語辞書の漢語に対し、文献資料と近年充実してきたコーパス資料を用いて調査・分析を行い、それによって明治期の漢語のあり方及び漢語理解を検討する。

明治期の漢語辞書について（第2章）

明治前期に大量の漢語辞書の刊行は「辞書史上かつ例をみないほど盛んであった」と評価されており、それらの漢語辞書は当時の漢語を研究する際に重要な資料として認められている。本章は、先行研究を踏まえて、明治期の漢語辞書を概観することを試みた。

まず漢語辞書はどのような資料について検討した。漢語辞書は、主に新時代における漢語の語形を備える熟語を掲出語とし、一定の枠の中で各掲出語に読みを施した上に語釈も与える資料のことであるとされている。前代の節用集と玉篇に比べて、節用集と玉篇は書くための辞書であるのに対し、漢語辞書はその時期の書物を読解するための辞書とみなされる。その掲出語は基本的には二字漢語となり、5000語前後の規模で実用性が高い。その刊行は明治10年前後を一つのピークとされており、国語辞書の出版と漢語の浸透によって明治20年以降減少してきた。本論文の調査対象となる四冊の漢語辞書について、明治期の漢語辞書は概ねに『新令字解』の系統、『漢語字類』の系統、『増補新令字解』の系統の三系統に分けられるとされている。特に『新令字解』と『漢語字類』は同じく翻訳兵学書、新聞、建白書・布令を読解するための辞書として誕生し、明治期の漢語辞書の起点とされている。『増補新令字解』はその二冊を継承し、後に辞書にかなり参照された一冊といえる。『校正増補漢語字類』は掲出語が豊富で、また初版本の語釈に改正が行われた点で注目に値すべき一冊といえる。

漢語辞書の語釈に「同上」と表記する見出しの漢語（第3章）

明治期はいくつかの見出しの漢語をまとめて説明することが散見される。そのまとめ方は、辞書によって異なっているが、辞書間のまとめ方の異同から、見出しの漢語の関連性が観察できる。しかし、同じ語釈を与えられた見出しの漢語は同義語として捉えにくい。それを検証するため、選定した四冊の漢語辞書のから、「暴挙」「暴動」「暴行」「暴発」・「生活」「生産」「生業」「生理」・「処理」「処置」「処分」「処断」の三組の同義語として捉えられている見出しの漢語を抽出し、明治期の辞書と『日本語歴史コ

ーパス』を用いて、それらの語の意味・用法を調査する。

その結果、各組にある見出しの漢語は共通する意味を持つ類義語である。明治初期の辞書で各語の意味記述が均質的で大きな相違が見られなかった。明治 20 年以降の国語辞書で意味・用法のバリエーションが見られる。『日本語歴史コーパス』から抽出した用例で「暴挙」「暴動」「暴行」「暴発」は「乱暴な行動」の意で共通しているが、「暴動」は「大勢でひき起こす騒動」、「暴行」は「他人に暴力を加える」、「暴発」は「物事を急に外に現われ出ること」の意で多用されている。「生活」「生産」「生業」「生理」は辞書で「なりわい、すぎわい」の意で共通しているものの、『日本語歴史コーパス』でほとんどその意味を表す例が少ない。「生活」は主に「人間が世の中に暮らしていくこと。」の意とあり、この意味の「生活」は人間の日常活動から精神的活動にかけて盛んに用いられており、精神的活動を表す際に合成語による使用が際立っている。「生産」はほぼ「一種の経済活動として、物を作り出すこと。」の意で使用されており、経済活動の一環としてあらゆる産業に用いられている。「生業」は「人間の暮らし」を表す点で「生活」との重なりがみえるが、「生業」は主に「職業」「営み」の意として使用されている。「生理」は「命を維持するために起こる諸現象、体の諸機能のこと」とされており、「生理学」をはじめ、「生理学者」「解剖生理」のような合成語が作られた。「処理」「処置」「処分」「処断」については、辞書の記述を見る限り、その四語の使い分けが判然としない。『日本語歴史コーパス』の用例で「処理」「処置」「処分」「処断」は「物事を取り扱って決まりをつけること」の意味で相通じて用いられている。「処理」は「物事を取り扱って決まりをつけること」の意で多用されており、公的機関の行動と常生活で個人事務の扱いに両方用いられている。「処置」は物事の「一時的の扱い」の意が目立つ点でほかの三語と区別されている。「処分」はほぼ公務の扱いに使用されており、「罰を加えること」の意で法令用語として用いられる点も際立っている。一方、「処断」は「物事を裁いて決まりをつけること」の意味に限定されている。

漢語辞書の語釈の中の漢語（第 4 章）

「文芸」という見出しの漢語の語釈は「ガクモンゲイノウ（学問・芸能）」と記されるように、選定した四冊の漢語辞書において、見出しの漢語の説明に漢語を使用する場合が見られる。しかし、見出しの漢語「文芸」と語釈の漢語「学問・芸能」は同質なものと捉えにくいと思われる。第 4 章では、選定した四冊の漢語辞書の見出しの漢語と語釈の中の漢語について、考察を行った。語釈の中の漢語を概観した上で、さらに語釈に多用されている漢語を洗い出し、それらの漢語のあり方を検討した。そのうえ、語釈が漢語一語である見出しの漢語を整理し、見出しの漢語と語釈の中の漢語を位置付けることを試みる。

選定した四冊の漢語辞書の語釈に漢語が使用されている割合が 2 割となり、それほど高くない。910 語の語釈の漢語と語釈に出現回数が上位となる 293 語の明治期以前の使用状況を探るため、『大漢和辞典』と『漢語大詞典』を用いて、語釈に出現した漢語の漢籍出典の有無を確認する。そして、『日国』の記述により、各語の日本での初出も確認する。その結果、漢語辞書の語釈に用いられた漢語の約 8 割が漢籍出典のある語であり、ほぼ古くから日本に使われている漢語といえる。また、古本節用集と近世節用集との比較を通じて、語釈に用いられた漢語の約 6 割が古本節用集の掲出語と共通しており、語釈に多用されている漢語は全体の 7 割に至った。明治期の資料と比較した結果、語釈の漢語の 8 割以上は『言海』の掲出語と一致しており、7 割以上は『和英語林集成』再版に見出せる。『安愚楽鍋』と共通するものが少ないが、語釈の漢語は各階層の登場人物に使用されており、女性層まで広がっていたとみなれる。同じ資料を用いて、984 語の見出しの漢語を調査したところ、見出しの漢語の 8 割以上が漢籍出典のある語であるものの、明治以前に使用例が確認できないものは語釈の漢語より多い。古本節用集と近世節用集の掲出語との比較結果について、古本節用集の掲出語となっているものはわずか 1 割となり、近世節用集の掲出語として立てられているものは 2 割となる。古本節用集と近世節用集のいずれにも掲出されていない語は 8 割近くに達している。その上、『言海』と『和英語林集成』再版両方に掲出されている漢語も 14% しかない。『安愚楽鍋』と共通する語はわずか 17 語となる。すなわち、語釈の漢語と見出しの漢語とは相当性格が違う漢語群であると考えられる。

明治期の漢語理解（第 5 章）

本章では、第 2 章から第 4 章における考察・調査結果を踏まえ、各章の結論をまとめた上で、明治期の漢語理解について検討を試みる。まず、明治期に姿が現れる漢語辞書は、一時的に盛んに刊行されている現象自体は、明治期の漢語理解の一面を表していると考えられる。同じく漢語を掲出語とした節用集に比べて、漢語辞書はより掲出語の意味を重視している。そのため、明治期の漢語流行の背景の下、節用集・玉篇のような文章を書くために参考する辞書より、文書を読むために誕生した漢語辞書のほうが一般人に使用されている。また、漢語辞書の掲出語の増補という現象により、当時漢語が言語生活の中で勢いよく広がっていくことがうかがえる。

語釈に「同上」と表記する見出し漢語の検討により、当時類義的な関係にある漢語が把握できた。このような漢語辞書が採用した見出しの漢語のまとめ方は、その時期、漢語の理解には語義の異なる部分を除き、中国語における類義的な関係をそのまま受け入れる傾向があることがうかがえる。抽出した三組の語の見出しの漢語の使用実態を調査した結果、各組の漢語は同じ意味分野に分類できる語で共通する意味特徴を持つものであるが、明治期にそれぞれ独自の意味・用法が展開されてきた。各組の漢語は

ほとんど明治中期頃において、「意味の一般化」「意味の特殊化」のような変化を遂げ、造語成分としても注目される。

漢語辞書の語釈の漢語と見出しの漢語について調査した結果、語釈に用いられた漢語、特に語釈に出現回数が上位となる漢語は日本語の中に定着したものとして当時の使用語彙に近い一群であると推測される。一方、見出しの漢語の中は前代とのつながりがかなり希薄であり、明治期に日常語化されていない可能性が高いと考えられる。語釈に用いられた漢語はすでに口語化・日常語化したものに対し、見出しの漢語はより文語的な存在であり、当時の一般の人々の理解語彙の範疇に属しているものと思われる。そして、漢語辞書の中では、位置付けが判然としない漢語があるため、今後は調査資料を拡大し、さらに検討する必要がある。

論文審査の結果の要旨

氏 名	何 芸 凡
論 文 題 目	明治期の漢語理解——漢語辞書をめぐって——
要 旨	
幕末から明治初期にかけて、新たな概念を理解するために様々な漢語が作られ、普及したということは、広く知られているところである。すでに様々な先行研究も出ているものの、資料が充実している研究領域であることから、さらなる研究の余地が残されている分野でもあった。本論文は、明治初期に出された漢語辞書に着目し、明治初期において漢語がどのように理解・受容されてきたか、その一端を考究したものである。以下、各章の概要について述べる。 まず「第1章・序論」では、明治時代の漢語をめぐる問題の所在を整理した上で、先行研究に触れつつ、本論文で採用する研究手法について略述する。 「第2章・明治期の漢語辞書について」では、本論文で研究対象とする『新令字解』『漢語字類』『増補新令字解』『校正増補漢語字類』の概要と、その位置づけについて述べる。明治初期に出現した、それまでの節用集などの辞書とも、また今日の国語辞書などとも性質を異にした漢語辞書の概要を述べるほか、この資料群をめぐる研究の実態を整理し、本論文の方向性を示す。 「第3章・語釈の『同上』と表記する見出しの漢語について」は、いくつかの漢語を取り上げ、それぞれの意味用法を検証した章である。 漢語は種類が多く、類義語相互の差異も判然としないことがしばしばある。明治初期の漢語辞書には、「誠恐」を「マコトニヲソレイル」と説明するような、単純に漢字に分解して、それを足し合わせた説明を行う手法が散見されるのであり、語釈として不十分な憾みがある。その上、現代語と異なった事情や、年代による変化が想定されることも相まって、明治初期の日本語において、どのように漢語の類義語が使い分けられていたか、そもそもどのような漢語群が類義語として把握されていたかを特定することは容易ではない。そこで本章では、漢語辞書で「同上」などという語釈が多数見られることに着目し、そのような語群の実際の用法について、日本語歴史コーパスを利用しつつ記述を試みている。 まず、『新令字解』では「暴挙」に「アラクレナルフルマヒ」とあり、続く「暴動」「暴行」「暴発」に「同上」などとのみ記載されていることから、編者がこの四語を類義語と認めていたことは明らかである。しかし、語形が異なる以上何らかの違いが存したはずであって、これ以外の資料について見る必要が出てくる。そこで、まず二十種類あまりの漢語辞書での記述を整理し、これらをどのように記述するかは辞書によりまちまちであることを指摘し、各語の異なりについてある程度の見通しを得ている。次に日本語歴史コーパスで用例を収集し、分析することにより、以上の四語は物理的な事柄か抽象的な事柄かなどで意味合いが異なっていたことや、時期によって意味が限定されていくなどの図式を導き出している。共時的・通時的双方の観点から、明治初期から現代語に至る状況を描き出し、国語辞書の語釈などでも十分に尽くされない事柄を記述している。 本章では、「暴挙・暴動・暴行・暴発」に続いて、「生活・生産・生業・生理」「処理・処置・処分・処断」についても同様の考察を行い、異なった語を検証することによって、明治期の漢語使用を立体的に描き出すことを試みている。	
主査記載 氏名 (自署) 實平雅夫	

「第4章・漢語辞書の語釈の漢語について」は、漢語で漢語を説明する手法をめぐって、相互の関係性を考察する章である。例えば『漢語字類』では「悔悟」に「コウクワイ」という語釈が与えられていて、「悔悟＝後悔」という把握が行われていること、またこの背景には「悔悟」と聞いても理解できないのが「後悔」と説明されると理解できたという関係性が推測され、つまり漢語の中にも難易の関係があり、「悔悟」より「後悔」の方が基本的な漢語だったという事情が見て取れる。ただし、その序列は現代語の感覚と合致しないところもある上に、説明に使われた漢語（語釈の漢語）にはどのような性質があったのかなど、様々な論点が浮かび上がってくる。

ここでは、語釈の漢語とは、漢籍や古い日本語の資料に出典が見られるような伝統的なものが多いことをまず指摘する。また、これらの語の古本節用集・近世節用集での掲載例が多いこと、『安愚楽鍋』の登場人物の中でもさほど教養が高くなかった層が使っていることなどから、日本語に根を下ろしたものであったことを指摘する。見出し項目に出てくる漢語と、それを説明するのに使われている漢語とは、質的な差があったことが本章の結論である。

最後に、「第5章・明治期の漢語理解」で、以上の議論をまとめ、今後の展望について述べる。

漢語の歴史的研究は従来も広く行われていた分野であり、幕末明治期は転換期にあるだけに注目度も高かった。この時期となると資料も豊富に残っていることから、一見すると単純な研究手法が通用しそうであり、取り組みやすい研究領域のようである。しかし実際には、論点が多岐にわたることも相まって、うまく研究対象を絞り込んで体系的な研究を行うことが容易でなく、膨大な用例に埋没する危険性も絶えない一面もある。そのような難点を前にして、まず取り上げる資料を戦略的に精選した上で、近年整備されてきているコーパスなどを取り入れるなど研究手法を工夫し、問題点を適切に整理しつつ論理的に考察して一つの方向性を示したという点で、高く評価できる論文であると言える。

以上のような観点から、本審査委員会は、全員一致で論文提出者・何芸凡が博士（学術）の学位を授与されるにふさわしいと判断した。

審査委員

区 分	職 名	氏 名 (自 署)	区 分	職 名	氏 名 (自 署)
主 査	教授	實 平 雅 夫	副 査	准教授	石 山 裕 慈
副 査	教授	緒 形 康	副 査	白百合女子大学 教授	常 盤 智 子
副 査	准教授	梶 尾 文 武			